赤い白無垢

飢饉の年だった。

春が過ぎ、夏が来ようとしていたにも関わらず、雨が降らなかった。

人も獣も草も地も飢えて渇いていた。

だから勿論、目の前に倒れていた狐に、びくの中の僅かな魚をあげてやるなど言語道断だった。

自分も飢えているのに。

しかし、狐の酷くへこんだ腹が目に入ってしまえば、無視する事など到底出来そうにもなかった。

(あぁ、多分ここで自分が何もしなかったらあっさり此処でこいつ死ぬだろうな)

そんな事が酷く明快に解った。

今日の晩飯の魚が予定より一尾少ないのは、だから、仕方がない事だった。

今日も今日とて粗食。

何かよくわからないとりあえず食える生き物を焼いた奴に、何かよくわからないとりあえず食える草の茹でた奴。

食えるだけで大吉、が今のご時世だ。

まだこの村は山に近いだけましだ。山から食料を採れるから。

川には何かしら食えるものがいる。…食いたいかどうかは、今は言っていられない。

｢頂きます｣

今日も食わせてくれた事に礼を言うから、山の神よ、川の神よ、どうか明日も自分を生かしてくれ。

食事は腹の満たないまま終わる。

「もし、もし、ごめんなさいまし｣

未だに鳴き続ける腹の虫を宥めていると、戸口に若い女の声がした。

村の女にこんな澄んだ声の奴はいないはずだ。誰だろう。

とりあえず戸口へ向かう。

今まで見たこともないくらいの別嬪が立っていた。

正直、そんな美人に口をあんぐり開けっ放しという顔を見せた事はかなり悔やまれる事だ。

それでもそんな自分の顔を見て、

｢あぁ、ようやく見つけました｣

女はにっこり笑った。

女はさきと名乗った。

とりあえず立ち話も何だから中に入れた。が、入れた後にこんな汚い中を見せるくらいなら戸口で話した方がましだったと思った。

｢…で、そのおさきさんは、何の用だ｣

｢先日のお礼をしとうて参りました｣

思い当たる節がない。この所、自分が生きるだけで精一杯だったから他人に恩など売った覚えはない。

｢あんたみたいな美人初めて見るが…何の礼だ｣

｢あなたさまは、私の命の恩人なのでございます｣

おさきは、まっすぐに自分を見た。

ますます訳がわからない。

人の命など、先日どころか生まれてこの方救った事などない。

｢あんた…どこの誰だ｣

そう問うと、おさきはすっと視線を逸らし俯いた。

｢それは、申し上げられませぬ｣

｢…そうか｣

わかった。おさきが誰か。

いや、『何』か。

それからというもの、毎日おさきは家へやって来て、何かと世話を焼くようになった。

掃除に洗濯、食事の用意。どこから取ってくるのか、こんな年だというのに作る飯は豪華だ。

得体の知れた物を、腹一杯食えるのは、とても幸せな事だとしみじみと思った。

最初は、きっとそうやって自分を騙すつもりなのだと思っていた。だから騙されたふりをして、もしおかしな動きをしたら次の日の夕食にしてやると考えていた。

しかし、おさきが家にくる日が続く内、こんな考えは消えた。

代わりに生まれたのは、誰でも普通思ってしまうだろう事だと自分は思う。

｢お前みたいないい女を、嫁に出来たらなぁ｣

と、口に出したつもりはないが、いつの間にか洩れていたらしい。

おさきが下拵えの手を止め、こちらを見て、僅かに目を見開いていた。

いつも顔付きの殆ど変わらない女だったから、これにはこっちが驚いた。

｢…ひょっとして、今の、聞こえたか｣

｢はい、お聞きしもうした｣

取り返しはつかないようだ。

いかにも無様だが、仕方ない。いつまでもおさきにお礼奉公させておく訳にはいかない。

もうそろそろ、どちらにせよ、踏ん切りが必要だろう。

深呼吸代わりの溜め息を一つついた。

綯っていた縄を放し、おさきを向いてきちんと座る。

｢おさき｣

｢はい｣

おさきもすっと正面に膝を付けた。察しのいい、賢い女だ。

｢この際だからはっきり言おう。お前は、自分には勿体無いくらい、いい女だ｣

白い肌に朱が昇り、かすかに俯くおさき。しかしその目は、僅かに悲しげでもあった。

ぐっと腹に力を込めて、真っ直ぐに見つめ、言葉を舌に乗せる。

｢お前さえ良ければ、うちに嫁に来ないか。

お前を、娶りたい｣

長い間があった。

いたたまれない気持ちになり、今すぐ逃げ出したくなったが、耐えた。

一人の秋の夜でさえ、これほど時を長く感じた事がなかった。

おさきは、何か言おうとしては口ごもり、また開こうとしては声を発しないまま閉じ、幾度か唇を動かした後、やっと答えた。

｢家の者と、話しおうてまいります｣

悲しげな目のまま、そう答えた。

それからしばらく、おさきは家に来なかった。

おさきが来なくなり、何日か経ったある日。

｢ごめんなさいまし｣

戸口で聞き覚えのない声がした。若い男の声だ。

初めておさきがやってきた時の文句と同じだと気付いた瞬間、戸口へ駆け出していた。

立っていたのは、おさきとよく似た顔つきの男。

｢さきの、家の者にございます｣

男は丁重に頭を下げた。

おさきのいない間に荒れてしまった中に、また少し悔いながらも通した。

｢まず、さきの命を救って下さいました事に御礼を申し上げます。また、本来ならばすぐに一族で御礼をすべきでしたが、このように遅くなりました事、お詫び申し上げます。何卒ご無礼をお許し下さい｣

男はそう言うと額を床に擦り付けんばかりにひれ伏した。

これには慌てた。

｢そんな、このような一介の里男にどうか丁重にならさないで下さい、面を上げてください｣

自分の懇願に、漸く男は顔を上げた。

｢つきましては、あなたさまとさきの婚礼のお話、我々喜んでお受けしたいと思います｣

自分の顔が、安堵と喜びで綻んだのを自分で感じた。

｢婚礼の儀についてですが…全て、こちらで用意させて頂きたく存じます。あなたさまは、ただ我々に全てお任せ下さい｣

男ははっきりとそう言った。

流儀などまともに知らないから、その通り従う事にした。

そして、式当日。

空は、いつも通りよく晴れていた。晴れの日をこれ程嬉しく思ったのはいつぶりだろう。

おさきの家が寄越した手伝いの者達により、式準備は瞬く間に整った。

手伝いの者に渡された衣装を身に付け、緊張しながら自分は待っていた。

向こうから婚礼道具を携え、花嫁を連れた花嫁行列がやって来るのが見えた時、いよいよと思い息すら苦しくなった。

その息が、止まるような事が起きた。

どぉん、どぉん、と。

腹の底に響き、山も揺るがすような音がして、

甲高い獣の鳴き声がして、

花嫁行列の中ほどが崩れ、残りは溶けるように消えて、

その後も太鼓か雷かのような音が幾度か続き、

その度に獣の声も上がり、

しばらくして、両方とも静かになった。

茫然とする自分の前に、大きな白いものを抱えた男が、息も絶え絶えに走ってきた。

近くに来たのを見ると、白いものは花嫁衣装に身を包んだおさきで、男は花嫁行列の衣を着ていた。

男は自分の前まで来ると、

｢…猟師が……皆…おさきも…撃たれ…て…おさ…きが…あなた…の…ところへ…と……｣

と言って、おさきを自分に渡し、崩れ落ちた。

地に伏すや否や、男は溶けるようにひとの形と衣装を失い、後に残ったのは一匹の狐だけだった。

体の下から、赤いものが広がった。

手伝いの者達は驚きの余り四つ足の姿で狐やおさきに駆け寄った。

それらを横目に捉えつつ、おさきを必死に抱き寄せた。

そうでもしないと溶けて消えてしまう気がした。

おさきは辛うじてまだ人の貌を保っていた。

｢おい、おさきっ｣

おさきは薄目を開けた。

｢あぁ…よかった。間に合いました…｣

そして息も絶え絶えに、ふっと微笑んだ。

｢喋るんじゃないっ。誰か、手当ての者を｣

｢いえ…無駄です、わたくしは…｣

｢しっかりしろ、そんな事を言うな｣

｢…聞いて…下さいますか…｣

｢後で聞く、だから今は無理を｣

｢今…、今聞いて欲しいのです｣

おさきが滅多に出さぬ強い声を出したので、思わず言葉を失った。

おさきは青くなっていたが、優しい顔をしていた。

おさきは涙を流しながらも笑顔だった。

まるで晴れた日に降る雨のような。

｢わたくしは…あなたさまに助けられた上…嫁にまで、願ってもらえて…幸せに…ございました…｣

｢自分も、幸せだったよおさき。だから、死なないでくれ、お願いだから｣

｢いいえ…あぁ、もう…あなた…さま…の…顔さえ……。

…お慕い、もう…し…、あげて…おり…ま…し……た……｣

そして、色の変わってしまってなお美しい唇を閉じ、微かに弓形につり、最後の雫を零して、瞼を下ろした。

魂が体を離れるように、狐に変じた体から、白無垢がするりと抜け落ちた。

言葉にならぬ叫びが自分の体中から発せられた。

その時、

よく晴れた空から、水の雫が落ちてきた。

一滴、二滴、落ちたそれは、干涸らびた大地に優しく迎え入れられた。

見る間にそれは数を増し、この目から流れるものと混じり合いながら渇いた生きとし生ける者達を潤していった。

白無垢に落ちた雨は、それを濡らし、内側に滲んでいた赤い血を広げ、染め上げていった。

すると、不思議な事が起こった。

広がるはずの血に染まらず、残った部分があったのだ。

よく見ると、それは文字になっていた。

自分は縋るようにその文字を追った。

『嫁にして下さると仰って下さったのに、このような事になり、あなたさまに申し訳なく思っています。

けれど、わたくしは狐。人ではない。

初めから、結ばれぬさだめだったのでありましょう。

今まで隠していて申し訳ありません。

それでも、あなたさまは、気づいておられるご様子でした。

気付いた上で、そう仰って下さって、わたくしは本当に嬉しゅう御座いました。

あなたさまに逢えて、幸せでした。

さだめですから、どうかお嘆きにならないで。悲しみに暮れないで下さい。

この雨は、

わたくしの喜びの涙、

感謝の涙なのですから』

赤く染まった白無垢と、おさきの亡骸を抱いて、自分はいつまでも天気雨に打たれていた。

それから、晴れながら雨の降る事を、『狐の嫁入り』と呼ぶようになったという。

赤い白無垢＊終